

について

STUDY INFLUENCE OF MOTHERS ANON ID HABITATION ENVIRONMENT ON EARLY CHILDHOODS CONTACT WITH NATURE

mmmm mmmmm

This study was conducted to investigate the influence of mothers (an attachment to nature and consciousness for environment) and habitation environment (habitation area and type of house) on early childhoods contact with nature. A questionnaire to mothers who had a child or children (in seniority classes in kindergartens) in Sapporo city (densely populated residential areas) or in local areas in Hokkaido was performed. Questions included 3 factors, that is an attachment to nature and nature experiences in early childhoods (12 items), mothers' attachment to nature (11 items) and mothers' environmental consciousness (11 items). An attachment to nature and nature experiences in early childhoods was closely correlated to mothers' attachment to nature. On the other hand, an attachment to nature and nature experiences in early childhoods showed low correlations with mothers' environmental consciousness. It was also evidenced by correlation coefficients. Habitation environment also showed very little correlations with an attachment to nature and nature experiences in early childhoods. These results suggest that it is important for mothers to commune with nature and to share the pleasure of an attachment to nature with their children.

Keywords: *Early childhood, Attachment, Nature experience, Environmental consciousness, Habitation environment*

幼児、愛着、自然体験、環境配慮意識、居住環境

序文

子どもの時期は、自然の中で小動物や植物と触れ合ったり、神秘的な自然事象や自然現象に出合ったりすることにより、豊かな感性や想像力、生命に対する愛護心、自然に対する謙虚さ等を育むとともに、自然物を利用した遊びを工夫すること等により、創造力を育むための、非常に大切な時期である。しかしながら近年、都市化に伴う幼児を取り巻く身近な自然環境の荒廃、テレビゲーム等の普及にともなう外遊びの減少、親の生活スタイルや価値観の変化等の影響を受け、幼児が日常的な遊びの中で自然に触れる機会は非常に少なくなった。このような状況のもとで、学校、地域社会、家庭等における環境教育、環境学習の重要性が指摘され、様々な実践が行われている。

幼児期の環境教育のあり方については様々な見解があるが、幼児が身近な自然との豊かな触れ合いを通して自然に対する謙虚さを育むことができれば、環境教育の重要なねらいである持続可能な循環型社会を担う人間を育てることに大きく寄与すると考えられる。そのためには保育者一人一人が、この目的意識をもって保育に取り組むことが大切である。しかしながら、幼稚園等実際の幼児教育の現場では、環境教育の重要性があまり認識さ

れておらず、環境教育自体が十分に理解されているとは言えない¹⁾。そのため、ここで行われている幼児が自然と触れ合うことを目的とした保育内容は、今だに飼育・栽培が偏重される傾向にあり、種の多様性や自然の循環性に気づかせたり、環境に配慮した生き方を身につけさせたりすることを目的とした実践はほとんど行われていない。幼児期から自然に対する正しい認識や愛着心を育て、環境教育を効果的に行うためには、幼児教育の現場において、幼児が身近な小動物や植物に愛着をもち、自然に対する謙虚な心が育つために効果的な環境(園庭等の自然環境および保育者等の人間環境)を整備することが重要である。著者ら²⁾は、身近な生き物が集まりやすいように配慮して園庭を整備することにより、昆虫や植物に対する愛着を示す行動が発展すること、またそのためには幼児と自然との接触に対する保育者等身近な大人の姿勢が非常に重要であることを報告した。また、家庭生活においても、園生活との連携が不可欠であり、自然環境および人間環境がおよぼす影響について検討することが重要である。特に、幼児と密接な関係にある母親の自然や幼児に対する姿勢は多大な影響をおよぼしていると考えられる。今川³⁾らは、幼児の植物への認識度と居住環境、親の養育態度との関連性について母親が